

## インサイドアウト思考

2025・8・27 重枝 一郎

現在、次期学習指導要領改訂に向けた審議が進められている。資質・能力の3つの柱の1つである「**学びに向かう力**」を詳しく分析する中で、その根本にある要素として「**初発の思考や行動を起こす力・好奇心**」が提起された。

この「初発の思考や行動」は、現桐蔭学園理事長・元京都大学教授の溝上慎一氏の言葉で言えば、「**インサイドアウト思考**」に当たる。最終的な解が見えない状態でも、自身の内なる思考（インサイド）を、他者や社会に向けて外化する（アウト）思考様式である。学校教育では、探究学習の時間や各教科等で取り込まれるパフォーマンス課題などの活用型の学習でこの思考を働かせている。

他方で、各教科等の習得型の学習では「アウトサイドイン思考」を働かせることが多い。自身の外側（アウトサイド）にある正解や目標に向かって思考や行動を合わせていく（イン）思考様式である。この「アウトサイドイン思考」は学習の基礎・基本であり、決して軽視されてはならない。学習において、この「インサイドアウト思考」と「アウトサイドイン思考」は、バランスよく育てていくことが重要である。

今、審議されている思考や行動の「初発」の部分は、「インサイドアウト思考」の本質的な特徴だと言える。最終的にどのような解にたどり着くかわからなくても、自身の考えや解を生み出そうとすることが、「初発」の本質になり、これからの予測困難で変化の激しい現代社会において、問題を解決するための必須条件になる。考えてみるとそれは現代的というより、「原始的」と言える。

「創造的」と言うときごく難しいことを発明して、社会から評価されると思ってしまふ。ここで言っているのはそこまでのことではなく、誰もが考えようとする瞬間の「思考の始まり」を重視するということである。それを「原始的」と言っている。つまり「わからないから考える」というシンプルな思考のこと。思考の原点回帰と言ってもよい。自ら考えようとしているかという態度等を「学びに向かう力」とつなげて評価する。

今、公立も含めた多くの高校が自校の魅力化を模索している。特に公立高校は、私立高校の授業料無償化に危機意識をもっている。選ばれる高校となるために、いろいろな高校が様々な特色を打ち出し、魅力化に乗り出している。その多くが、「探究」に力を入れ、国公立進学に成果を出すというものだ。

「探究」を通して、「〇〇大学に、こんな研究をしている先生がいるみたい」という感じで、自分たちが設定したテーマに関わる研究者を自分たちで探し、アポを取り、話を聞く。本校の「はないち」でも同じような動きをする生徒がいる。私が今一番期待する、「可能性を広げよう」とする生徒像である。この夏もいろいろなことがあったが、音楽科の新開先生がスタジオ録音の現場に数名の生徒を連れていき、コーラスの録音を体験させた（響創コースの取組）。この歌は、世に出るそうである。

多くの学校は、探究的な学びの手法を教科の授業に取り入れ、授業改善をしていく考えになっている。これは、これからの時代に生き残る教師としての、生き残りをかけた戦いであると思ってほしい。

なぜかこの「インサイドアウト思考」の話を書いていたら、校長研修だより86「サラリーマン金太郎」を思い出した。再度読んでみてほしい。